



新春インタビュー

衆議院議員

太田昭宏 氏

聞く人●長島貴好
本紙社長

人生二周制度で社会活力と健康維持

長島 従来に見ない様々な社会問題が出ています。なにか社会が荒廃しているように感じます。私共の暮らしを創る産業は、人々の暮らしの中でどのように住生活環境、インテリアライフスタイルを作っていくか、また大きくは今後どのような都市形成をしていくかを痛切に考えます。その点からお話ください。

太田 少子高齢化や限界集落や空家などの問題が日に日に深刻化しています。こういった物事は、負荷がかかり続けると、頑丈な金属がある瞬間を境にあっさりと折れてしまいがごとく、一瞬できわどい状況にまで発展してしまいます。私が大臣をしていた際、「コンパクトネットワーク」という国土のグランドデザイン2050を作った政策があります。

まずはコンパクトシティの個性を活かしつつ、シティ同士で交流し、連携を取るといった仕組みづくりを取り組んでいきました。温度が異なる空気が一カ所に集まると対流を起すように、対流促進型国土形成と位置付けられたこの仕組みの中では、個性が異なるコンパクトシティ同士が出会うことで、相乗効果が生み

出されるようにするつもりです。これから引き続きそういった取り組みを進めることが重要だと考えています。

長島 具体的な取り組みとしてどのようなものがありますか。

太田 政府全体で地方創生がテーマになっていましたので地方の環境を改善するために様々な取り組みを行いました。「コンパクトシティ+ネットワーク」をすすめると同様に、それが実現できない場所や距離のあるところには、それぞれ「小さな拠点」を作り対流促進型の国土政策をすすめました。

そして、国交省をあげて、高齢者住宅やサポート付き高齢者住宅に力を入れ高齢化への対応をしてきました。時代が変わってきているので、ただ土地のあるところに高齢者住宅を建てればよいのではなく、各世代が集まりコミュニティが生まれ、仕事が発生する場所に作らなければならないと考えています。

60歳までで人生一周、120歳までが二周目といった「人生二周論」にもありますが、定年退職をした後は余生なのではなく、新たな働き方や生活をスタートするタイミングであることを、積極的に肯定するような時代づくりをしなければいけません。そのためには、70歳代、80歳代の方々がどのように暮らし人と接するかが大切になり、常にコミュニティ形成なども念頭に置きながら進めていくことが肝心になってきます。

なんらかの働き方を獲得し人に貢献しながら年金とは別の収入を得ていくような生きがいある暮らし方が送れる場所を作っていく必要があります。

長島 仕事があることで生きたる活力が生まれるので高齢者にはまさにそういう場が必要で

太田 年金プラス10万円ほどの収入、そしてコミュニティ交流のある空間づくりが進めば、若者の働きによって生まれる年金を若者以上の数の高齢者が受給するといったシステムも変わってくると思います。「二周目人生の生き方」を考え、高齢者自らが、社会の中で自分らしく働き活躍できるようにすれば社会保障問題も改善できると考えています。

長島 いい意味での経験を積んだ老練な、若い人になんか知識と経験を持った働き手が、活躍できる能力主義の考えが浸透すればライフスタイルの活力にもなりますね。そういったことを「コンパクトネットワーク」で促進することでした。具体的な事例について教えてください。

太田 富山県富山市のコンパクトシティは成功例として話題になっています。これは「LRT」という電車が走っていることで知られていて、在の空き家数は更に多いと聞いています。後は余生を過ごすだけだからといって、高齢者は病棟のような場所で暮らすのでなく、より自由に交流し、働くことの出来る生き方を街づくり、住宅づくりを通して実現していきたいと考えています。

長島 高齢者が孤立して一人で暮らすことの危険性を、近頃身をもって感じる人が多いので、是非とも実現してほしい街のあり方だと思います。

太田 高齢者住宅を単発で建て、バリアフリーにも配慮しようといった従来の取り組みだけでは、これから高齢化対策を考えるにあたって不十分になってきました。2025年には認知症患者の数が約700万人に達すると言われ、さらにその半分は自分の住宅に居ると言われています。その350万人が自宅の中で徘徊をしたり、部屋が分からなくなってしまうといった様になるのは避けたい事態です。

そういったことを解決するために間取りを工夫したり、IT技術を活用した住居内での動線確保を行ったりすることで、対処することが求められる時代になってきたと考えています。

長島 農業中心の時代にはあった地域毎のつながりや人間関係が今では薄くなり、マンションで隣合わせに住んでいる人の顔や仕事も知らないまま暮らす時代になりました。そういった中で高齢者が活躍することの出来る働き場などを作っていくことが社会のためにも理想的ですね。

太田 「余生」や「老後」という概念から一度離れ、人生二周目の新しい生き方というライフスタイルを確かなものにしていかなければいけないと思います。「元管理職の老人の孤独」というのも非常に大きな問題になっており、活躍していた前線から離れた後の過ごし方に適応できない人々に対して、何らかのケアが必要で

長島 社会が荒廃化していくのを防ぐためにはやはり社会の中での「人間性」が必要だと思います。発達したAIやロボット技術で単純作業を効率化していくことも大切ですが、同時に人にしかできない部分というものも、社会に残していくべきだと思っています。

太田 人間が何をし、人間には何が出来るかが重要になってきました。AIは単なるデータを集め計算する、いわば計算機であると言われていましたが、現代の子どもたちは自分で考えようとせず理解力もない「ロボットのような人間」になりつつあると言われていま

AIに勝てるはずの人間の子どもが教科書を読む理解力がないというのが非常に危険なことで、人間にしかない強みが多くなっていく殺伐とした未来は避けるべき事態です。若い人への「人間らしく考える」教育がより必要になってきたのかも知れません。

長島 集団の中での教育体制や、働くうえで必要な価値観といったものを学べる場があるといいかもしれません。

太田 教育の場も、人を動かす政治の場も「人間らしさ」が求められ、知識で動かすだけでなく人間の知恵と工夫を活かすことが重要になってきました。

長島 その通りだと思います。では最後に、家具による人づくりや暮らしづくりといったものに関してどのようにお考えをお聞かせください。

太田 私自身、家具に

太田 教育の場も、人を動かす政治の場も「人間らしさ」が求められ、知識で動かすだけでなく人間の知恵と工夫を活かすことが重要になってきました。

長島 付加価値はなんだという、提供者の「こころ」がお客さんにとっての付加価値になっていくわけですね。本日は良いお話をありがとうございました。

コンパクトシティ+ネットワーク地域を